

学位論文題名

クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立と展開

— 部族首長層マナプの考察から —

学位論文内容の要旨

本論文は、18世紀後半から20世紀初めまでのクルグズ(キルギス)人社会の変容と、ロシア統治の成立・展開を、部族指導者層マナプを中心に据えて分析するものである。特に、静態的・伝統的遊牧社会としてのクルグズ社会とロシア進出による変化とを二元論的にとらえる見方を批判し、征服者・統治者であるロシア人の意図や視線と、クルグズ人の有力者や諸集団の利害・戦略、周辺諸勢力の動向が複雑に絡み合う様子を描き出すことを目的とする。方法としては、文献の読み込みによる歴史学的手法が基本であるが、第5章では写真資料も使い、人類学的手法を意識している。

序論では、クルグズ民族史と英雄史、ロシア帝国への併合史と統治史などの研究潮流を、マナプの位置づけを中心に簡単に整理する。そして、ジューンガル政権崩壊後の諸勢力の交錯とロシア進出の過程で形成されたマナプの権力が、ロシア統治のもとでいかに再編され、変容していったのかを明らかにすることを、課題として設定する。また、論文で使用する主な史料であるカザフスタン、ウズベキスタン、クルグズスタンの文書館史料(行政文書や、クルグズ人の請願書など)、ロシア帝政期の新聞・雑誌、およびテュルク語の史書を簡単に紹介する。

第1章「帝政ロシアによるクルグズの包摂過程」は、18世紀後半から19世紀中葉を考察対象とし、ジューンガル政権期にフェルガナ方面に移住していたクルグズ人が同政権崩壊後チュイ、イッシク・クリ周辺に戻り、カザフ人との牧地争いやコーカンド・ハン国の進出、清朝やロシアとの交渉の過程で、部族首長層が顕在化していった様子を描く。特に1840年代に、カザフのケネサル反乱を鎮圧する過程でロシアとクルグズの間でやりとりされた文書を分析し、北部クルグズの部族指導者の呼び名として従来の「ビー」に代わり、17世紀の強力な指導者の名に由来する「マナプ」が史料上で使われるようになるのが、まさにこの時期であることを指摘する。その後1850年代にクルグズ人を支配し始めたロシアは、カザフ人地域での「上席スルタン」制に倣って「上席マナプ」を任命し、ヒエラルヒーを構築した。マナプの側でも、ロシアによる対コーカンド戦や、不穏とされる部族の監視に積極的に協力し、自らの権力と牧地を拡大させていく者たちが現れた。

第2章は「トルキスタン総督府の創設とクルグズ」は1867年から1870年代末までを扱い、

マナブの権力と地域秩序が、トルキスタン総督府管轄下のセミレチエ州トクマク郡でどのように再編されたかを分析する。1867年に導入された統治規程案は、首長権力を含む「部族原理」の解体を目標としたはずだったが、実際に郷長に選出されたのはマナブたちであった。ロシア人の総督・知事・郡長の方針には若干のばらつきがあったものの、マナブ全体の排除よりは、クルグズ人統治やコーカンド征服に役立つ有能なマナブと、そうではないマナブとを選別することが目指された。マナブの中には、郷長になって権力をふるおうとする者と、シャブダン・ジャンタエフのように、郷長になって行動の自由を束縛されるのを避け、郡長らと直接関係を結んで実力者となった者がいた。

第3章「対マナブ闘争」としてのクルグズ統治の成立と展開」は1880年代から1890年代末まで、つまりロシアの中央アジア征服完了後のクルグズ統治におけるマナブの位置づけを考察する。1870年代以降のロシアの行政官や学者は、マナブは貴族に類するものと認識するようになったが、このことはマナブによる人民の搾取に目が向けられることにも結びついた。1890年代から行政官らは「対マナブ闘争」と人民の保護を唱えたが、実際にはロシア権力はクルグズ社会の末端にまで浸透できなかつたため、いかにマナブをロシアと人民の間の「障壁」として問題視しようとも、具体的な施策を実行しようとする時にはマナブとの提携が依然として不可欠だった。ただし長期的にはマナブの権力は弱体化していき、彼ら自身そのことを自覚していた。

第4章「マナブたちの社会实践の諸相」では、20世紀初頭に権力の弱体化に直面したマナブたちが、権威を再構築するために行ったいくつかの活動を取りあげる。まず歴史記述へのマナブの関与の例として、1914年に刊行されたオスマン・アリー・スドゥコフ著『幸あるクルグズの歴史 *Tārīkh-i qirghiz-i shādmānia*』が、クルグズ民族意識を表現すると同時に、シャブダン・ジャンタエフ一族の系譜と事績を描く一種の王朝の書でもあったことを指摘する。マナブらは、モスク建設やメッカ巡礼などイスラーム実践でも大きな役割を果たした。また、ロシア系農民の植民推進と関連してロシア当局が行った遊牧民定住化奨励策に積極的に呼応したマナブもいたが、定住移行推進派と反対派の対立には、マナブ同士の派閥対立という側面があった。

第5章「マナブの「死」」は、1912年に行われたシャブダン・ジャンタエフの葬儀と供養に焦点を絞る。警察署長やコサックも参加して盛大に行われた葬儀と供養では、ロシア権力とシャブダンの関係の深さがさまざまな形で表象された。しかし、シャブダンの権威が息子たちに引き継がれず、ロシア当局も特権の世襲を認めなかったことは、マナブ権力の衰退を示している。

結論では、マナブが、ロシア帝国と周辺地域との境界、ロシア権力とクルグズ人民との境界という位置を利用して権力を維持したこと、それを可能としたのはロシア権力の弱さないし不備であったこと、マナブらがロシアに対し積極的かつ柔軟な態度をとって自己変革を試みたのとは裏腹に、ロシア当局のクルグズ社会への視線は、不信任に基づく貧弱なものであったことを指摘する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宇 山 智 彦

副 査 准教授 長 縄 宣 博

副 査 准教授 守 川 知 子

学 位 論 文 題 名

クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立と展開

－ 部族首長層マナプの考察から－

本論文は2009年11月30日に提出され、同年12月18日に審査委員会が発足した。その後5回の審査委員会と、2010年2月10日の公開口頭試問を経て、同年2月22日の文学研究科教授会において審査結果報告を行った。

審査委員会は、討議においてまず、本論文が先行研究の少ない分野における画期的な労作であることを評価した。クルグズスタン（キルギス）近代史については、欧米や日本では本格的な研究が皆無に近く、現地での研究も固定的な枠組みに縛られがちである。そのような研究状況の中で、膨大な史料を使い、新鮮なアプローチによって書かれた本論文は、今後多くの研究者に参照されると思われる。

当該研究領域における本論文の研究成果として、具体的には以下の点が挙げられる。第一に、ロシア帝国期クルグズ社会における権力関係を、地域に密着した視点で、しかも周辺地域に目を配りながら記述したことである。中央アジアの遊牧民地域の歴史に関しては、彼ら自身が書いた史料が少なく、ロシア側の記録の密度にもむらがあるため、地方レベルの詳細な研究を行うことが難しいが、本学位申請者は多様な史料を駆使し、できる限り微細な分析をすることに成功している。同時に、クルグズ人地域の「境域性」に着目し、カザフ人やコーカンド・ハン国など周辺勢力との関係を分析に組み込んだ点も秀逸である。

第二に、マナプ制の成立と変容を、単なる伝統社会の有力者層という固定観念から離れ、ダイナミックに論じたことである。マナプがロシアの進出と統治体制の成立に協力し、さらには統治体制の不備をも利用しながら、権力の維持・拡大を図った姿が生き生きと描き出されている。また史料の時系列的な整理によって、マナプという名称の定着時期や、貴族的階層としての認識の確立と対マナプ闘争の関係が解明されている。マナプの歴史記述・イスラーム実践・定住化への関わりへの分析は、クルグズ社会の近代化を考察する鍵も提供している。

第三に、近年発展してきたロシア帝国論の成果を取り込みつつ、ロシア帝国論に独自の貢献

をなしている。ロシアの政策を現地のさまざまなアクターが自分の利益のために利用したこと、ロシアが情報収集・学術調査を通じて構築した現地社会についての認識が、現地社会自体の民族・部族区分や階層区分の再編成をもたらしたことは、近年の研究でよく取り上げられるが、申請者はこれらの問題を、クルグズスタンという研究の手薄な地域について鮮やかに論じている。また、申請者自身は必ずしも明示的に議論していないが、帝国権力が社会の末端に浸透できないために現地有力者に頼ると同時に、彼らの存在を統治の障壁と感じてスケープゴートにするという構図は、ロシア帝国の他の地域にも見られるものであり、本論文は今後の比較研究に好適な材料を提供している。

口頭試問で審査委員会は、上述のような本論文の研究成果を極めて高く評価した。同時に、研究をさらに発展させるために取り組むべき課題も指摘した。まず、セミレチエ州トクマク郡（現在のクルグズスタンの北部・中部）という一地域に限って考察を行ったことは、定点観測をして詳細かつ深みのある議論を展開するという意味では成功しているが、ロシア帝国期クルグズ社会の全体像を描くためには、東部のイッシク・クリ郡や、南西部のフェルガナ州などの状況も分析しなければならない。本論文の記述は1910年代半ばで終わっているが、革命・内戦を経てソヴェト期のマナプ消滅に至る過程もまとめる必要がある。コーカンド・ハン国やヤークーブ・ベク政権（東トルキスタン）とクルグズの関係についても、さらに掘り下げる余地がある。ただし言うまでもなくこれらは今後の課題であり、本論文自体の欠点ではない。

審査委員からは、本論の含蓄に富む内容を各章の小結や全体の結論に必ずしも十分反映できていないこと、レトリックに凝るあまり意味や論理が曖昧になっている文章があること、アラビア文字テュルク語史料の翻訳や翻字に誤りがあることなども指摘された。しかしこれらは技術的な問題であり、本論文の先駆性と独創性、重厚な成果の価値を損なうものではない。

したがって、審査委員会は全員一致して、本論文は博士（学術）の学位授与にふさわしいとの結論に達した。